

概念図式」が誕生した。さらにそれがその他の概念図式にも影響し、公共的世界観ひいてはリアリティを科学の概念図式が規定しているかのようになった。そのため、宗教をはじめとする概念図式も科学の概念図式の力の優位を当然のことと認識し、それに基礎づけられようとするようになる。これが創造科学やID論の誕生の根源にある捻れであると考えられる。

しかし、結果としてうまく科学に基礎づけられなかった宗教的な概念図式である創造科学やID論は、フィクショナルなものと認識されているにもかかわらず、未だ多くの人々を魅了している。「科学の概念図式に強い影響を受けたメタ概念図式」のもつとで、なぜこのようなことが起きるのか。ひとつには、宗教は本質的にフィクショナルな側面をもっているということから説明できるだろう。キャロル・M・キューザックが提起する「つくられた宗教」——想像による産物であり、「真実」であることを主張しない、にもかかわらず宗教のように見え、機能する——は、その側面をうまく捉えている。本発表では例として、ID論を批判するためにつくられ、かつ、自らのフィクション性を積極的に認める「空飛ぶスパゲッティ・モンスター教」も取り上げた。また、パスカル・ボイヤーなどの認知科学的アプローチにおいて、宗教における物語の重要性が改めて注目されていることもかわる。

魅力的な物語を有した「つくられた宗教」は、フィクションのままに力をもち得る。そしてやがて、メタ概念図式と概念図式のダイナミズムによってリアリティをもち得るだろう。ただし、それらに対する「信」はキリスト教モデルの *belief* と

は異なる。そして、フィクショナルな物語としては成功している創造科学やID論もまた、「つくられた宗教」の要素をもっていると言えるのではないだろうか。

生命の起源——デザイナーとしての神概念の科学的検討——

十津 守宏

スタンレー・ミラーが、原始地球の大気組成を再現した環境下でのアミノ酸の合成に成功した時、多くの生物学者は近い将来、生命の自然発生と化学進化のメカニズムが実験室の中で再現されることを期待した。しかし、ミラーの実験の成功以降、半世紀以上が経過した今日においても、依然として生命の自然発生のメカニズムは解明されていない。そればかりか、最新の研究から明らかになったことは、少なくとも我々が生きている地球上で生命が自然発生する確率はほぼ零に等しいということである。

そもそも生命が自然発生しないことは、かのパスツールの実験により科学的に証明されている。従って、「神」の存在を受け入れられない自然科学では、最初の生命にかぎり自然発生したという仮説を土台として現在の理論的枠組みが形成されているのである。そして、地球上での自然発生の可能性そのものが否定されつつある今日においては、かつて自然科学の領域においては異端視されていた生命の起源を宇宙(地球外)に求めるパンスペルミア仮説が生命の起源を解き明かすものとして支持されつつある。この仮説は、生命の起源を地球上から宇宙へと求めることにより、時間と無限とも思える空間的拡がりを含む

方につける。そして、地球上ではほぼ零である生命の自然発生の可能性を現実的な数理的可能性へと高めるものである。単なる、問題の先送りであるとも指摘されているが、宇宙の起源に関する議論において、今日展開されている量子力学を基盤に展開されたマルチバース宇宙論と同様の理論的枠組みを展開することにより、デザイナーとしての神の介入の可能性を排除するものである。マルチバース宇宙論は、無境界仮説と虚数の導入により、ユダヤ・キリスト教的な歴史を導く人格神だけでなく、「不動の動者」としての神観念すら導入することなく、一切の現行の物理的法則からの逸脱もなしに、人間の生存が可能となるように絶妙なバランスのもとに成立しているとされている。しかし、これらの議論はあくまでもこの宇宙と生命の起源を説明する論理的モデルの一つに過ぎない。

化石資料や生物の多様性、今日における最先端の研究成果が明らかにしつつある遺伝子が持つ環境に対する潜在的適応力などの数々の科学的証左から、進化という現象が科学的真理であることは揺ぎ無いものとなりつつある。しかし、進化のメカニズムと最初の生命の発生のそれは似て非なるものである。進化が、「ただの複雑化」であるのに対して、生命の自然発生とは、「方向性を持った複雑化」でなければならぬからである。リチャード・ドーキンスが指摘するような「盲目の時計職人」が、生命を自然発生させることは極めて困難なのである。環境への潜在的適応力を持ち表現型を通して進化を演出することが判明した遺伝子による突然変異と自然選択による進化のメカニ

ズムは解明できても、その遺伝子そのものの由来に関して、最先端科学は未だに明確な答えを出せないこともまた厳然とした事実である。

無境界説の提唱者であるかのスティーヴン・ホーキングは、哲学は科学（特に物理学の進歩）についていけなくなっているといみじくも述べている。しかし、今日の「生命の起源」に関する議論を鑑みると、自然科学の領域ではタブーとされる形而上学的議論が果たすべき役割は、その研究が行き詰まりを示している今日でこそ再評価されても良いのではないのだろうか。

明治大正期における『中国哲学』の構築と静坐の実践

野村 英登

理想論として語るのではなく、現実には人が学んで聖人に至ろうとするのであれば、よほど持つて生まれた善人でもないかぎり、まず心の修養が必要だと考えるのは自然なことであろう。事実、儒教においては、静坐が瞑想法として宋代より重視されてきた。江戸の儒者たちも朱子学や陽明学を奉ずる者達に静坐を実践していた者が少なくなかった。しかし現代、中国哲学を研究する者は基本的に静坐を実践しない。そもそも制度として静坐の実践を行う学部学科が大学に存在しないから当然である。そもそも明治大正期において、東洋思想の近代化が目指されたとき、その近代化は端的に儒教を『中国哲学』として構築することを意味していた。中国の伝統的な知の体系は哲学なのか宗教なのか。あるいは研究なのか実践なのか。そのように問われながら、アカデミズムとしての『中国哲学』は構築されて